

格助詞が果たす接続関係の意味への貢献に関する構文文法的考察
—P トキ Q 構文/P トキニ Q 構文に見られる意味の差に着目して—

松浦幸祐 (大阪大学 言語文化研究科 博士後期課程)

kosukematsuura1221@gmail.com

0. 要旨

本発表の目的は、P トキ Q 構文と P トキニ Q 構文に見られる意味の差に着目し、格助詞が果たす接続関係の意味への貢献について考察することにある。先行研究では、両構文の意味の違いに関して、P トキニ Q 構文でのみ P トキの焦点化が可能であると記述されているが、その理由については、益岡 (1997) による従属節の従属度の観点からの説明を除いて、理論的な説明が与えられていない。

これに対して、本発表では、(A) P トキと P トキニはそれぞれ名詞「時」を主要部とする無助詞名詞句と有助詞名詞句であると分析する必要があると提案する。その上で、(B) P トキ Q 構文/P トキニ Q 構文における焦点化の可否が、無助詞構文/有助詞構文一般の対立から導かれることを主張する。さらに、理論的観点 (Langacker 1987, 2008, Croft 2001) から、(C) P トキニ Q 構文を含む有助詞構文の焦点化には、格助詞の機能、すなわち、精緻化関係の明確化が大きく貢献していることを議論する。

1. はじめに

本発表の提案と議論：

- (A) P トキ Q 構文/P トキニ Q 構文の P トキ/P トキニは、それぞれ名詞「時」を主要部とする無助詞名詞句/有助詞名詞句であると分析する必要がある。
- (B) P トキ Q 構文/P トキニ Q 構文における焦点化の可否は、無助詞構文/有助詞構文における焦点化の可否の一部として一般化できる。
- (C) 有助詞構文での焦点化には、述語に内在する精緻化サイトと名詞句との精緻化関係の明確化が前提となっている。

(1) P : 「京都の古本屋に行った」 Q : 「この本を見つけた」

- a. 京都の古本屋に行ったときにこの本を見つけた。
b. 京都の古本屋に行ったときこの本を見つけた。 (益岡 1997: 139, 一部修正)

2. 先行研究とその問題点

2.1. 先行研究

2.1.1. P トキと P トキニの分析

先行研究の共通点：トキ/トキニは、P に付属して P と Q との関係を表す形式

[I] 寺村 (1992)

- (2) 「関係的内容を表す部分も、[...]アイダ(間)、トキ(時)のように本来名詞であったものが接続助詞と同様の構文的働きをするようになったものがあったり[...]」(寺村 1992: 130)
- (3) 農家の主婦は集団で朝暗いうちに家を出て基地建設に向かい、暗くなってから帰って来る。(ibid.: 129, 下線は原文による)

[II] 益岡 (1997)

- (4) 「連用節は述語や主節全体を修飾する節である」(益岡 1997: 13)
- (5) 節とは「複文における述語を中心としたまとまり」(ibid.: 1)
- (6) (7)では「「とき」、「ので」、[...]がそれぞれの接続形式である」(ibid.: 14)
- (7) a. 出かけようとしたとき、電話のベルが鳴った。
b. 暗かったので、何がどこにあるのかよくわからなかった。(ibid.)

[III] 日本語記述文法研究会 (2008)

- (8) 「主節の述語を副詞的に修飾する節を副詞節という」(日本語記述文法研究会 2008: 7)
- (9) 節とは「1つの述語を中心としてまとまりをなす文の一部」(ibid.: 3-4)
- (10)(11) は「主節の「お守りを買った」のが従属節の「清水寺へ行った」のと同時にであることを示している」(ibid.: 165)
- (11) 清水寺へ行ったときに、お守りを買った。(ibid., 下線は原文による)

2.1.2. 焦点化と従属度による説明

- ・P トキニ Q 構文 : P トキ (事態 Q の発生時) の焦点化が可能
- ・P トキ Q 構文 : P トキの焦点化が不可能

焦点化 : 「主節の事態が起こったことを前提として、その事態がいつ起こったのかを新情報として従属節の部分で表すこと」(益岡 1997: 140)

- (1) a. 京都の古本屋に行ったときにこの本を見つけた。
b. 京都の古本屋に行ったときこの本を見つけた。(再掲)
- (12) 「P トキニ Q という構文は、Q という事態の発生が既知の情報であって、それがいつ起こったのかが問題になっている場合に典型的に使われる」(寺村 1992: 155)
- (13) 「P トキニ Q」では焦点化ができるが、「P トキ Q」ではできない。(益岡 1997: 140)
- (14) 「「ときに」は、「とき」[...]に比べ、主節の事態の成立したときを強調する文[...]で用いることが多い。」(日本語記述文法研究会 2008: 172)

・益岡 (1997) : 格助詞を伴う従属節の焦点化の可否を「従属節の従属度」の観点から説明
従属節の従属度 : 「主節の命題に対する従属節の結びつき」の強さ (益岡 1997: 160)

- (15) 「主節の主張[・疑問]のスコープに含まれる従属節は焦点化が可能であり、含まれないものは焦点化が不可能」(益岡 1997: 148)
- (16) 主節の事態を限定する格成分はそうでないものより従属度が高い (ibid.: 159)
- (17) 「従属節の従属度が高いほど従属節は疑問[・主張]のスコープに入りやすい」 (ibid.: 160)

2.2. 先行研究の問題点

先行研究の問題点 :

- ① P トキ/P トキニを連用節と分析しているが、他の連用節とは振る舞いが異なる
- ② 「従属節」以外での焦点化に触れられていない

問題点① : P トキは他の連用節 (e.g. ノデ) と異なり、連体節 + 被修飾名詞と同様の振る舞いを示す

- (18) a. 出かけようとした男
b. 出かけようとしたその男
- (19) a. 出かけようとしたとき、電話のベルが鳴った。(= 7a)
b. 出かけようとしたそのとき、電話のベルが鳴った。
- (20) a. 暗かったので、何がどこにあるのかよくわからなかった。(= 7b)
b. *暗かったそのので、何がどこにあるのかよくわからなかった。

問題点② : 「従属節」以外での焦点化に触れられていない

・有助詞構文/無助詞構文で、焦点化/脱焦点化の現象が観察される

加藤 (1997) : 無助詞の機能 (加藤の用語では「ゼロ助詞」) を「脱焦点化」と規定

NP : 名詞句、CM : 格助詞、Pred : 述部要素、InfoP(x) : x の情報としての重要度

- (21) 「脱焦点化機能とは、NP-CM-Pred という形式の文の中で、NP が最重要情報である、すなわち、InfoP(NP) > InfoP(Pred)が成り立つ、と解釈されるのを回避する機能である。従って、NP- ϕ -Pred という文では、情報の重要度は InfoP(NP) \leq InfoP(Pred) と解釈される。」(加藤 1997: 67)

- (22) [暑い日。外から汗だくで帰ってきた子どもに親が尋ねる]
- a. お水 ϕ ほしい?
- b. ?お水がほしい? (ibid.: 66, 「?」は加藤による)

(23) [弟がテレビをつけっぱなしにして、ステレオを聴いているので、姉がやって来て「テレビ ϕ 消してよ」と言う。ところが、弟はステレオの方を消してしまう。そこで、姉が言う。]

a. テレビを消してよ

b. *テレビ ϕ 消してよ (ibid.: 68, 「*」は加藤による)

3. 理論的背景

3.1. 精緻化サイト (Langacker 2008, Croft 2001)

精緻化サイト (elaboration site): 他の構造によって精緻化されるスキーマ的な下位構造

(24) “A schematic element elaborated by another component is called an **elaboration site**, or **e-site** for short.”

(Langacker 2008: 198)

例: *Hannah sings* では、Hannah が SING の精緻化サイト (= SINGER) を精緻化 (図 1)

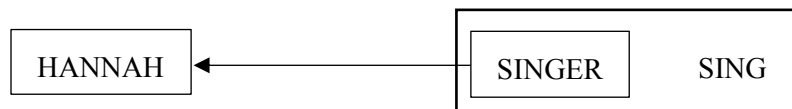


図 1. *Hannah sings* における精緻化構造 (Croft 2001: 274, 一部修正)

3.2. 自律性と依存性 (Langacker 1987, Croft 2001)

Langacker (1987): 自律的な構造が依存的な構造を精緻化する

(25) “One structure, *D*, is dependent on the other, *A*, to the extent that *A* constitutes an elaboration of a salient substructure within *D*.” (Langacker 1987: 300)

Croft (2001): 依存的な構造も自律的な構造を精緻化する

(26) “[T]he location of the chasing event is a substructure of the semantic structure of *chase*, and *in the park* also elaborates that substructure of *chase*.” (Croft 2001: 274)

(27) Randy chased the dog in the park. (ibid.: 272)

< 単方向的な依存関係 >

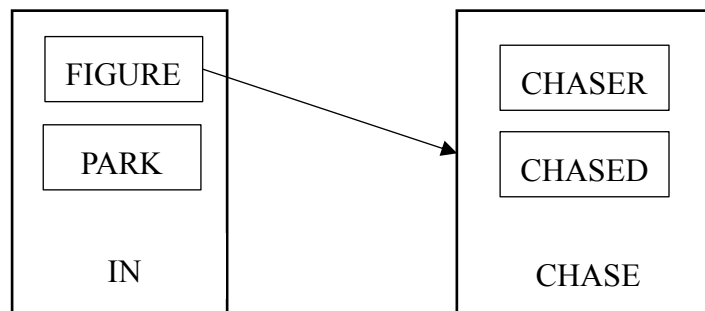


図 2. *chase + in the park* の単方向的な依存関係 (Croft 2001: 275 を基に作成)

<双方向的な依存関係>

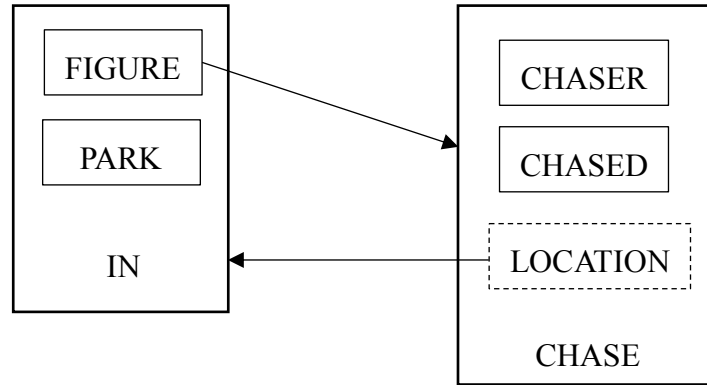


図3. *chase + in the park* の双方向的な依存関係 (Croft 2001: 275, 一部修正)

4. 考察

4.1. 焦点化機能への格助詞の貢献

ここまでのまとめ：格助詞を伴う名詞句は焦点化でき、格助詞を伴わない名詞句は焦点化できない

・「格成分は、主節が叙述する事態を限定する」(益岡 1997: 143)

cf.) 格助詞は「名詞に付いて用言が表す意味との論理的な関係(格関係)を表示する」(小矢野 2014: 102)

<本発表における一般化>

- ・精緻化の観点から見た格助詞の機能：述語に内在する精緻化サイトに対応する要素を明確化する
- ・焦点化の成立には、精緻化関係の明確化が前提となっていると一般化できる

(28) a. ブタ、食べる。

b. ブタが食べる。

c. [何がこの餌を食べるの?] ブタが食べる。

d. [何がこの餌を食べるの?] ??ブタ、食べる。

(29) a. 床、落ちてるよ。

b. 床に落ちてるよ。

c. [どこに落ちてる?] 床に落ちてるよ。

d. [どこに落ちてる?] ??床、落ちてるよ。

(以上作例)

- ・無助詞構文：述語に内在する精緻化サイトと名詞句との精緻化関係が明確化されない(図4)。したがって、焦点化が不可能

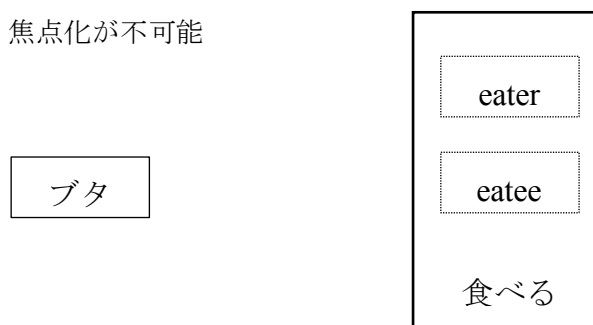


図4. (28a) における精緻化関係

- ・ 有助詞構文：格助詞によって、述語に内在する精緻化サイトと名詞句との精緻化関係の明確化が行われる(図5)。したがって、焦点化が可能(図6)

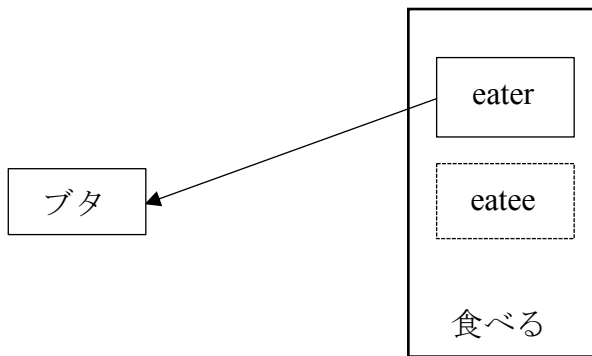


図5.(28b)における精緻化関係

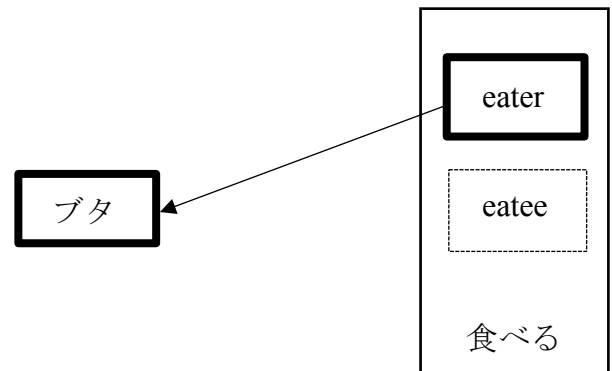


図6.(28bc)における焦点化

- ・ P トキ Q 構文：P トキの焦点化の前提となる、事態 Q の精緻化サイト (TIME) と名詞句 P トキとの精緻化関係の明確化が行われない(図7)。したがって、焦点化が不可能



図7.P トキ Q 構文における精緻化構造

- ・ P トキニ Q 構文：格助詞ニによって、事態 Q の精緻化サイト (TIME) と名詞句 P トキとの精緻化関係の明確化が行われる(図8)。したがって、焦点化が可能(図9)

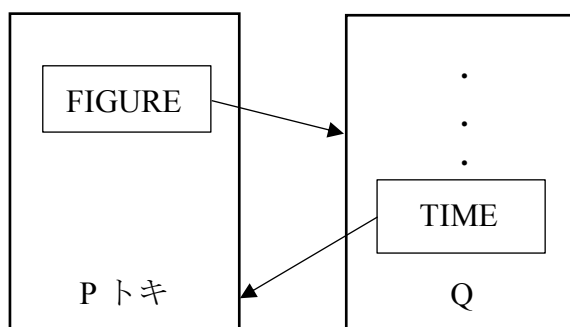


図8.P トキニ Q 構文における精緻化構造

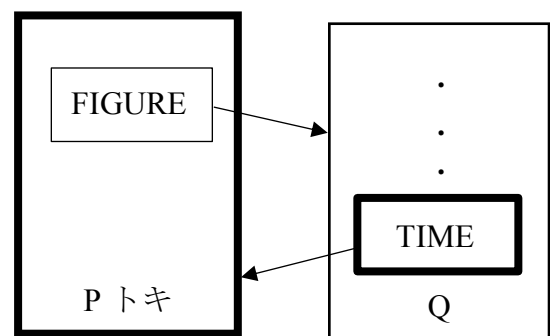


図9.P トキニ Q 構文における焦点化

4.2. 従属度による説明との関係

- ・「主節の内部にあるものは焦点化が可能」という点は従属度による説明と共通
- ・本発表では P トキ/P トキニを無助詞名詞句/有助詞名詞句と分析したため、無助詞構文/有助詞構文一般に当てはまる現象としての説明が可能

益岡 (1997): 格助詞を伴う従属節は主節の事態を限定する役割を担うので従属度が高く、主張・疑問の
スコープに含まれるため、焦点化が可能

本発表: 格助詞は、主節事態の意味構造に内在する精緻化サイトと名詞句との精緻化関係を明確にする
故に、(i) 格助詞を伴う名詞句では、焦点化の前提である精緻化関係の明確化が行われているた
め、焦点化が可能
(ii) 格助詞を伴わない名詞句では、焦点化の前提である精緻化関係の明確化が行われな
いため、焦点化が不可能

5. おわりに

- (A) P トキ Q 構文/P トキニ Q 構文の P トキ/P トキニは、それぞれ名詞「時」を主要部とする無助詞名詞
句/有助詞名詞句であると分析する必要がある。
- (B) P トキ Q 構文/P トキニ Q 構文における焦点化の可否は、無助詞構文/有助詞構文における焦点化の可
否の一部として一般化できる。
- (C) 有助詞構文での焦点化には、述語に内在する精緻化サイトと名詞句との精緻化関係の明確化が前提
となっている。

参考文献

- 加藤重広 (1997) 「ゼロ助詞の談話機能と文法機能」『富山大学人文学部紀要 27』: 19-82.
- 小矢野哲夫 (2014) 「格助詞」日本語文法学会編『日本語文法事典』: 102-103, 大修館書店.
- 寺村秀夫 (1992) 「時間的限定の意味と文法的機能」『寺村秀夫論文集 I』: 127-156, くろしお出版. [初出:
渡辺実編 (1983) 『副用語の研究』, 明治書院.]
- 日本語記述文法研究会編 (2008) 『現代日本語文法 6 第 11 部 複文』, くろしお出版.
- 益岡隆志 (1997) 『複文』, くろしお出版.
- Croft, William (2001) *Radical Construction Grammar: Syntactic Theory in Typological Perspective*, Oxford University Press. [『ラディカル構文文法』山梨正明監訳, 渋谷良方訳, 研究社.]
- Langacker, Ronald W. (1987) *Foundations of Cognitive Grammar, vol.1: Theoretical Prerequisites*, Stanford University Press.
- _____. (2008) *Cognitive Grammar: A Basic Introduction*. Oxford University Press. [『認知文法論序説』山梨正明監訳, 碓井智子・大谷直輝・木原恵美子・児玉一宏・中野研一郎・深田智・安原和也訳, 研究社.]